



## 説教要旨「わたしの願いを超えて」

ルカによる福音書 22章39～46節

「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」(42節)。

最後の晩餐を終えたイエス様は、オリーブ山でそう祈りました。それは目前に迫っている、十字架の苦しみと死を免れさせてくださいと願う祈りでありながら、一方で、「わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」と、神様のご計画にすべて委ねるという祈りです。それは、逃げ出したくなる苦しみを、神の御心として何とか受け入れようとする葛藤そのものです。

どうしようもない苦しみや悲しみ、試練の中で私たちは、「この杯をわたしから取りのけてください」と祈り願います。苦しみを取り除いてほしい、こんな試練にあわせないでほしい、それが私たちの正直な思いです。しかし、そのように試練から逃げ出すことだけを願い求めて祈るなかで、いつしか疲れ果て、祈ることをやめ“眠り込んで”しまいます。

イエス様が祈り終え、弟子たちのところに戻ってみると、弟子たちは眠り込んでいました。イエス様が必死に祈られている傍らで、なんと情けない弟子たちだろうかとも思います。しかし彼らは怠けて寝ていたのではなく、イエス様に命じられたとお祈りしていたのです。その結果、「悲しみの果てに」眠りこんでしまいました。祈るということは辛く悲しいのです。なぜなら、自分のおかれている現実を見つめざるを得ないから。しかも、祈ったからといってその厳しい現実が好転するとは限らないから。

自分の思いばかりを押し通そうとする祈りを、眠ることなく祈り続けることなど出来ません。思い通りにならない現実はある。どうにかしようともがいてもうまく行かないことばかりです。苦しくて、悲しくて、すべてを諦めてしまいそうになる、そんな日々です。しかし、その独り子を十字架にかけられるほどに私たちを愛してくださる父なる神が、私たちにはおよびもつかない仕方その愛を示してくださった神様が共にいてくださるのです。この神の愛に信頼し、「しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください」と祈りつつ、このどうしようもない現実を共に歩んで参りましょう。

(2020・11・22 説教者：稲垣真実)